

学院の新たな門出を祝う 新学院長誕生と両中高創立60周年

校友会 山櫻会 会長 川原 俊明



はじめに

満開の桜のもとで、幼稚園から大学院まで、総合学園・追手門学院の各校の入学式が滞りなく執りおこなわれました。

公立高校の授業料無償化、社会の景気後退などの影響で、私学全体が、経営危機にさらされています。追手門学院も、決して人ごとではありません。むしろ、これを好機にとらえ、教学と経営の抜本的改革を進め、「強い私学」を構築すべきです。

追手門学院では、今、追手門ブランドの育成に力を注いでいます。そのせいか、今年の入学式では、大手前中高の新中学1年生全員が、プレキャンプでの練習の成果をみせ、みごとに校歌を3番まで歌い上げていました。

茨木中高入学式でも、佐々木校長が、祝辞の中で、学院歌の歌詞「錦城の…」を詳しく解説され、学院の歴史に対する新入生へ関心を高める努力をされていたのが印象的でした。

校友会山櫻会も、平成22年度のスタートを切りました。「開かれた山櫻会」をめざし、さらに強力な同窓会活動に邁進する所存です。

学院の新たなステップ

学院における、今季最大のトピックスは、竜田邦明新学院長の誕生でしょう。

学院では、従来、大学の学長が、同時に学院長に就任される例が多くありました。大学学長が、学内における教学部門をすべて仕切るのが当然だ、との論理です。

しかし、追手門学院大学改革の必要性は、急務であります。追手門学院大学の運営の成否は、学院全体の経営を直撃します。

落合正行新大学学長には、大学改革に専念していただき、ぜひとも改革を貫徹していただきたいと思います。大学改革なくして、追手門学院の輝かしい未来はありません。

このような状況の下で、学院理事会の承認のもとに、大学の教学を担当する学長と、学院全体の教学を掌握する学院長が、業務を分掌していただきました。このこと自体が、差し迫った学院改革に大きな役割を果たすでしょう。

同時に、竜田邦明新学院長が、本学卒業生（小64・中高7）である、ということです。

本学卒業生が、学院長に就任されるのは、学院の歴史始まって以来の快挙です。私たちすべての卒業生は、新学院長を暖かく受け入れ、協力体制を築きたいと思います。

校友会山櫻会も、当然、全面バックアップします。

卒業生の位置づけ

本学卒業生による学院長就任、という新たな展開に、私たち卒業生は、再度、学院との関係を問われています。

特定のオーナー不在のわが母校を、最後まで支えるのは誰であるべきか。母校の発展を支えるべきは、卒業生です。母校の発展なくして、

同窓会もありません。卒業生は、母校に、何をなすべきでしょうか。私たち卒業生は、母校の入学者確保とともに、就職先支援に力を発揮できる立場にあります。

卒業生は、校友会山櫻会だけでも約3万人、大学校友会を含めると約7万人を輩出しています。

卒業生は、母校の大応援団なのです。

卒業生の子弟を母校へ入学させる。母校も、卒業生の関係者に対する入学を配慮する。

相互理解があれば、少子化現象による入学志願者低減の影響は少なくなるでしょう。就職の場面でも、同様のことが言えます。卒業生企業ないし卒業生参加企業は、母校卒業生の積極的採用を図りましょう。そうすれば、就職率の大幅向上が実現し、母校の評価上昇に確実につながるのです。

卒業生は、母校の人的財産なのです。このことを、卒業生も母校も、もっと明確に認識し、追手門学院の良さを発揮すべきでしょう。

開かれた山櫻会

私たちは、開かれた山櫻会をめざします。

山櫻会は、内部的には、一人でも多くの一般会員を活動に参加していただけるよう、対外的には、母校の支援体制を強化すること、目的にしています。

同様に、母校も、社会で活躍する卒業生の情報を生かす必要があります。

学院と卒業生は、車の両輪です。両者の緊密な関係こそが、母校の発展につながるでしょう。

両中高60周年記念事業

今年は、大手前・茨木両中高60周年記念の年です。記念フェスタ、合同体育祭、連続記念講演と、盛りだくさんの記念事業が予定されています。

これを機会に、両中高が、大々的な人事交流を含め、互いのメリットを生かしあいながら、ともに飛躍していただきたいと思います。

校友会山櫻会は、これを応援しています。

総会へのお誘い

今年の山櫻会総会には、特別企画を用意しています。

まずは、竜田新学院長の講演。本学卒業生である新学院長の抱負とともに、化学者としての生きざまから、私たちに今後のヒントを得たいものです。

つぎは、40歳同窓会の開催。すでに還暦同窓会が定着し始めました。20歳の成人式は、各校で催されています。その中間層を対象にした40歳同窓会を企画しました。

私たちは、多くの卒業生の方々が、山櫻会総会を利用し、同窓会の集いに参加していただけるよう、心よりお待ち申し上げます。